

特集にあたって

金生由紀子*

こころの問題の対応にあたって、患者とともに家族の状態を把握して支援することは重要なはずだが、患者に焦点を当てすぎて家族に関する認識に偏りが生じて対応が不適切になることがあり得る。時には、家族を背景のように捉えたり治療者の役割の分担を期待したりすることがあるかもしれない。しかし、家族は、患者、周囲の人々や関係機関、さらには社会とのかかわりの中でさまざまな困難を体験して、支援を必要としている。しかも家族の対応が患者に影響して悪循環を来し、患者にとっても家族にとってもより困難が大きくなることが少なくないと思われる。そして、家族の中だけで解決を求めてしまうと悪循環からいっそう抜け出しにくくなる。患者のためにも家族のためにも、家族が適切に対応できるように働きかける心理教育が有用であると同時に、家族だけで抱え込むことがないように、家族の困難や苦痛が軽減するようにという配慮が望まれる。

患者は家族をはじめとする環境との相互のやり取りの中で発達してくるものであり、家族についても同様のことが言える。本特集では、周囲の人々から社会までの広がりの中における家族という位置付けを踏まえるとともに、家族としての発達の経過とその節目を意識して家族支援について検討することを目指した。

そして、子どものこころの問題や妊娠・出産をめぐるこころの問題や認知症高齢者のようにライフステージにおける位置付けが明確な場合も、そうでない場合も、経過を見渡して家族支援が論じられた。また、思春期・若年成人世代がん患者やヤングケアラーという、それ自体は精神疾患でないもののメンタルヘルスへの対応として近年に重要視されるようになった事項を取り上げたり、統合失調症の家族の立場から論じていただいたりして、多側面から検討が重ねられた。だからこそ、こころの問題を抱える人の家族を支援する際に共通することがかえって浮かび上がってくるのではないかと考える。

* 東京大学医学部附属病院こころの発達診療部 (〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1)